

## 「つまずきの庭」にて

—メキシコは、太平洋を挟んだ日本の隣国

「奥の細道」の西語訳もおこなった作家のオクタビオ・パスは、メキシコと日本の関係性をこのように述べたが、歴史をさかのぼると、1613年に東北地方の仙台藩主伊達政宗が家臣の支倉常長率いる慶長遣欧使節をメキシコ、スペイン、ローマに派遣したのがここ石巻の月浦港で、その交流史は深い。あるいは体感的にわたしたちは知っているかもしれない。太平洋を挟んだ隣国の揺れは、そのまま波となってこちらまで押し寄せる。ともに地震や津波といった自然災害を幾度も経験してきた土地柄だ。

本展「つまずきの庭」の着想は、震災の経験からはじまっている。あの東日本大震災を、当時暮らしていた名取市北釜で経験し、その後も宮城県を拠点に活動しているアーティストの志賀理江子は、震災後このように語った。

—芸術に社会性があるのではなく、芸術が根を張る場所が社会なのだ

以来、この言葉が、ずっとわたしの胸の内にある。そしてこの言葉は、次なる問いを運んできた。「わたしたちの社会とは、どのような現実の上に営まれているだろう？」

震災直後、わたしたちは奪われた多くの命や、失われたものに胸を痛めながらも、これまでを見直し「ほんとうに大事なものを」を切実に問うことで、これからをつくりだそうとしていた。心はさまざまに引き裂かれながらも、他者とともにいられる場を生みだそうと、どれほどの対話を重ねてきただろう。つまり、あの頃のわたしたちはとても民主的だった。震災直後、歴史学者のジョン・ダワーはこのことを「スペースが生まれる」と語り、警告も忘れなかった。「もたもたしているうちに、スペースはやがて閉じてしまう」と。そのもどかしさが背中を押し、わたしは2020年3月に仙台を立ち、メキシコ南部の街オアハカへ向かった。

到着から数日のうちにパンデミックの波はこの街にも押し寄せ、過酷な状況は現在も続いている。しかし、誤解を恐れずに言えば、人々に余裕があった。当初それは、非常事態(断水や停電、ストライキ等)への日常的な対応からくるものかと思われた。だが、次第にそれは、彼らが「自分たちが大事だと思うもの」をつかんで離さないからだと感じるようになった。

彼らはよく「Bonito(ボニート)」と口にする。その土地で育った果物を指さして。あるいは、山肌へはばりつく家々の灯りを見つめながら。またあるときは、トルティーヤを焼く仕草にもこの言葉は向けられた。「Bonito」には「美しい、可愛い、素敵」などの訳語があるが、無理に訳すとズレてしまう。彼らがこの言葉を発するとき、現実の中で磨かれた感性や想像力が働いていることがわかるし、そうあることへの労いや尊厳が紐づいている。つまり、「Bonito」こそ、彼らの立ち戻る場なのだ。滞在中の約一年間、街は国の非常事態宣言を待たずに自主的に閉鎖され、集落の入口にはコミュニティによる検問所が、市場には手製の手洗い場が現れた。自宅隔離でアルコール依存者が増えないよう酒類の販売は制限され、犠牲者の追悼集会のかわりに、広場の木には吊いのリボンがたくさん結ばれた。アーティストたちは休校になった大学や美術館にかわる芸術実践の場を、街中に絶えずつくり続けていた。過酷な状況を連帯しながら乗りきろうとする活性化した空気。みなケアしあって、自律的に動き、寛容さを生んでいた。スペースが生まれ、息づいている。

翻って、考える。太平洋を挟んだ隣国のこの地に、果たしてその余波は届いていただろうか。2021年9月、わたしはメキシコから帰国した。久々に会った志賀は、なめらかな復興道路に車を走らせ、高くそびえる防潮堤沿いを歩きながら、「復興は、津波よりも大きな力でわたしたちを圧倒した」と、いまだもがくその胸中を語った。あの震災から間もなく11年の月日が、世界的なパンデミックという新たな災厄のなかで経過し、誰しもが一度ならず願った好転の機会はいまだ霧の中にある。もたついているうちに押し寄せたのは巨大な利権と資本の波だったのかもしれない。そして誰かの心を内側から萎えさせ壊していったのかもしれない。あたりを見渡すと、「復興」の名のもとにならされてゆく東北沿岸の風景が広がっている。彼女の目には、近代社会がいかに人々の精神を抑圧してきたかの歴史の縮図が映り込み、「わたしたちの欲望は何に根ざしているのだろうか」「わたしはなぜ苦しいのだろうか」と、呟いた。

芸術の根を張る場所が社会ならば、社会とは共同での営みを指すならば、なおのこと、みなで立ち止まって考えられる場をつくりたいとわたしは願った。その先に芽吹いたのが本展だ。

志賀は、2008年に宮城に移り住んで以来、主に東北で制作してきたシリーズ作品を横断的に展示し、さらに本展に寄せて新作も制作した。映像作品には、現在のわたしたちの歩みの姿が象徴的にあらわされている。会期中には、振付家の磯島未来によるワークショップや、ゲストをむかえたトークイベントもおこなう。メキシコ・オアハカのアートコレクティブ「Subterráneos」が、震災から命の転生を願った版画を贈ってくれたことも後支えとなった。版画の彫り跡には、彼らの日々の芸術実践も刻印されている。また、度重なる災厄を躯体に刻み、手をかけられながらここに建ち続けるこの旧観慶丸商店に、考えるトリガーとしての場を設けられたこともよろこびのひとつだ。志賀のスタジオから会場に持ち込まれたものに直接触れ、椅子に腰かけ、ゆっくり時間を過ごして欲しい。世界をどのように信じられるのか、また同時に抑圧を強いる力に対し目をそらさず抵抗をもするという、あなたを含むわたしたちの手探りの実践のはじまりに、本展はある。それぞれの現実はいかに作用しあっている。

2022.2.19

清水チナツ (本展キュレーター)